Fukushima National College of Technology

カントの教授就任論文における道徳哲学の形成

The Formation of Moral Philosophy in Kant's Professor Assumption of Office Paper

（平成19年9月受理）

笠 井　哲*（KASAI　Akira）

Abstract

The purpose of this paper is to consider the formation of moral philosophy in Kant's professor assumption of office paper. I can summarize the concept rule of the moral philosophy in Kant's professor assumption of office paper as follows. The moral philosophy is recognized only by pure wisdom itself and does not include an experiential thing of the sensitivity at all. The moral philosophy offers the ultimate cause of the value judgment. The value is derived by a purpose of the pure wisdom, and the standard must be a general principle of the pure wisdom.

The characteristic and the significance of the moral philosophy in this professor assumption of office paper are the following points. Primarily it is the point where the rationalism of the wide sense was established. Second there is universal validity of the moral because of a thing of the pureness at the point that it established because moral philosophy was prescribed as a thing belonging to pure philosophy. Third the moral philosophy shows the ultimate cause of the value judgment, and it is a point lasting for a concept of the limit moral completeness. Fourth, intuition of the wisdom is completely a refused mark.

1．はじめに

1770年代のカントにおいて、まず研究対象とすべき重要なテキストは、『感性界および英知界の形式と原理』（以下、教授就任論文と略す）である。この論文は、世界一般の形而上学に対する「予備学」である。そのための形而上学の原理論として、感性界と英知界のそれぞれの認識原理の確立が中心課題となっている。川島秀一はこの著作について、

> カントが前批判期において長年渇望しながらも批判的あるいは懐疑的にならざるをえなかった合理論の形而上学の復権の試みであり揺り戻し（1）

と位置づけている。したがってこの論文は、直ちに道徳との関連を持つものではなく、また道徳そのものに関する研究でもない。

しかし、この論文には『純粋理制批判』に至る重要な認識論的な要素および悟性認識と純粋道徳哲学、さらに英知界との関係等の問題が含まれている。本稿の目的は、カントのこの教授就任論文における「道徳哲学」の形成を考察することである。

2．教授就任論文の成立

まず、カントの教授就任論文が如何にして成立したかについて、見ておこう。

1760年代の後半のカントの仕事は、その前半に比べて精彩を欠いている。その理由は、カントの思想形成に関わる事情や、大学の仕事が繁忙であったからといわれている。特に、40歳代半ばでいまだ定職のない状態は、カントの精神状態に影響を与えたであろうことは容易に想像がつく。1769年冬学期のはじめ、エアランゲン大学から、1770年1月にはイェーナ大学から招聘されるが、カントは故郷への愛着や健康上の理由などでこれを断っている。

1770年3月15日、ケーニヒスベルク大学の数学正

* 福島工業高等専門学校　一般教科（社会）
（いわき市平上荒川字長尾30）

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

教授ラングハンゼンが亡くなると、ようやくカントに正教授への就任の機会がめぐってきた。翌日、カントはプロイセン諸大学の監督長官・マクシミリアン男爵に書簡をしたため、道徳学のポストか、論理学と形而上学の現員教授を亡き数学教授のポストに配置転換した後のポスト化、そのいずれかに就けるように願い出ている。その書簡に、

> 私はこの春で47歳になるのでございますが、年齢をとるにつれまして、将来の窮乏に対する心配は増すばかりでございます[2]。

とある。このカントの希望は直ちに聞き入れられ、同年3月31日、カントを母校ケーニヒスベルク大学の論理学および形而上学の正教授に任命する勅令が下される。ここにケーニヒスベルク大学哲学正教授イマヌエル・カントが誕生する。時にカント、46歳に22日を残し、私講師になってすでにほぼ15年の年月が経っていた。

カントは、慣例によって教授就任論文を発表した。本論文の意図は、カントの次の文章から明らかである。

> 純粋な悟性使用の第一原理を含む哲学は形而上学である。感性的認識と英知的認識との区別を教える予備学は形而上学の一部である。我々はこの予備学に関して、この論文で一つの見本を呈示する[3]。

形而上学と予備学の関係については、同年9月2日付のランベルト宛の手紙の中において、次のようにやや詳しく語られている。

> 感性の最も普遍的な法則は、何しろ純粋理性の概念および原則だけが問題とされるはずの形而上学において、誤って重大な役割を演じています。たとえただ消極的な学問（一般的現象論）とはいえ、全く特殊な学問が形而上学に先行しなくてはならないと思います。この特殊な学問において、感性の諸原理にその妥当性と制限が規定されるでしょう。それは感性の諸原理が、従来ほとんどいつもそうであったように、純粋理性の諸対象についての判断を混乱させないためです。……しかしある物が全く感官の対象としてでなく、普遍的で純粋な理性概念によって、物あるいは実体一般等として考えられる場合は、これらを上述の感性の根本概念に従属させようとすると、非常に誤った命題が生じることでしょう。……本来の形而上学を、感性的なものとの一切の混淆から防ごうとするこのような予備的訓練は、それ程たいへんな骨折りをしなくても有効な叙述と明証法に容易にもたらされると私には思われます[4]。

ここで、カントの本来の哲学的関心は形而上学にある。その形而上学において、従来感性の普遍的法則が重大な役割を演じ過ぎてきた。この感性の僭越を正すためには、感性の諸原理の妥当性と制限が規定されなければならない。これは形而上学に対する「予備学」であって、同時に形而上学の一部である。この予備学の見本を呈示することが、教授就任論文の意図である。

それではこの予備学は、道徳思想の形成と如何なる関連を持つのであろうか。

3．感性的認識と空間・時間の観念性

予備学は、「感性的なもの」と「英知的なもの」、「感性的認識」と「悟性的認識」との区別を重要な課題としている。

> 感性とは、自己の表象状態がある対象の現前によって一定の仕方で触発されることの、それによって可能なる主観の受容性である[5]。

これに対して、「悟性」は「理性」とも呼ばれ、「その固有の性質のために自己の感官の中に至りえないものを、それによって表象しうる主観の能力」[6]と規定されている。

> 感性の対象は感覚物であるが、単なる悟性によって認識されるに違いないもの以外に何物も含まないもの、それは悟性的存在である[7]。

前者がフェノメノンであり、後者はヌーメノンである。そして認識は、感性の法則に服する限り、「感性的」であり、悟性の法則に服する限り「悟性的」または「理性的認識」である。さらに感性的認識は、「現象するがままの事物の単なる表象」であるのに対し、「悟性的認識は存在するがままの事物の表象である」とされる。

ところで、感官の表象には質料と呼ばれる感覚とともに、形式と呼ばれる感覚的なものの形象が内在する。そこで感官を触発する対象の多様が、表象の全体的統一を得るためには「精神の内的原理」が必要となる。この原理が「感性界」を成立せしめる。

言い換えれば、感性界は「形式の主観的原理」、「心のある種の法則」[8]によって成立するのである。それはカントによると、時間と空間であり、「純粋直観」に含まれているものである。

> 人間の純粋直観は、何らかの感覚的なものがそのもとで思惟される普遍的ないし論理的概念ではなく、それらがその中で思惟される個別的概念である。それゆえに純粋直観は空間と時間の表象を含む[9]。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

かくて時間・空間は、「現象的宇宙の、形式的原理、根源的、普遍的、あらゆる感性的なもののいわば型であり条件である」とされている。ここから、時間と空間に関して次の特性と意義があげられる。

（1）時間と空間は感官から生じるのではなく、感官によって前提される。言い換えれば外的感覚から抽象されるのではなく、外的知覚そのものの可能性がそれを予想する。

（2）時間と空間の観念は、一切を自分の中に包含する個別的表象であって、一般的、抽象的、共通的概念ではない。

（3）時間と空間は感覚的直観ではなく純粋直観である。

（4）時間と空間は客観的なもの、実在的なものではない。

要するに、時間・空間は客観的実体でも抽象的概念でもなく、主観的条件であり、観念的なものであり、型であり、純粋直観である。それゆえに時間と空間は感性界の形式的原理となりうるのであり、それによって「現象界」が必然的に成立しうるのである。

ここで注目されることとは、とりわけ「空間」の概念に関して『空間における方位の区別の第一根拠について』（『空間における方位』と略す、1768 年）における空間概念から重要な進展が見られる点である。『空間における方位』というこの論文の意図は、

> 絶対空間は、あらゆる物質の現存在から独立に、物質の合成の可能性の第一根拠としてそれ自体で固有の実体性を持っている[10]。

ということを証明する点にあった。

この考えは、教授就任論文において一部は否定され、一部はそのまま生かされている。すなわち『空間における方位』においては、絶対空間が「固有の実体性」を持つとされ、しかもそれは理性概念によって把握されるとされている。

これに対して、教授就任論文では、上記の（4）にみられたように、明確にそれ自体客観的なもの、実在的なものではない、と否定的に断じられている。したがって空間は real な第一根拠ではなく、ideal な主観的直観形式として、純粋直観であるとされた。これが否定された側面である。これに対し肯定されている側面とは、絶対空間の持つ一切の物質の現存在からの独立性と、その物質の合成の「可能性の第一根拠」が保持されている点である。

さて、この空間論の進展は、重要な実践的意義を持っているとみなければならない。それは空間における魂、ないし精神の場所という問題と直結しているからである。すなわち道徳が成立するためには、精神は自由でなければならない。しかし精神が空間によって繋縛されていては、自由は考えられえないからである。

『視霊者の夢』[11] においては、魂は「霊的実体」であった。それは

> 単純ではあるが、それにも関わらず一つの空間を満たすことなしに空間を占めている（すなわちその中で直接的に活動的でありうる）[12]

ものであった。魂は身体に宿る。すなわち霊的実体は身体に宿るがゆえに空間を占めているが、それ自体空間の中に存在し、それを充実するものではない。

ところが教授就任論文では、魂は空間の占有すら完全に否定され、空間は客観的な存在ではなく、時間とともに人間精神の直観形式とされるに至ったのである。カント自身の言葉で言えば、「非物質的実体の物体的宇宙における場所、魂の座」、言い換えれば「非物質的存在者の物質的世界における現在」は、「力学的であって空間的ではない」[13] のである。この言葉の意味するところは、魂がそれ自体で一定の場所に保持されているがゆえに、身体との相互作用の関係にあるのではなく、身体と相互に作用しあう関係にあるがゆえに、魂にはそれ自体宇宙における一定の場所が付与されている、ということである。したがって、魂は身体とのこの相互関係が解消されると、空間における一切の位置は否定されることになる。「魂の場所性」について、カントの結語は次の通りである。

> 非物質的なものは、外的に感性的に知覚されうるものの普遍的条件、すなわち空間から全く取り除かれる。……それゆえに魂に対しては、絶対的で直接的な場所性は拒否されうるが、それにも関わらず仮言的で間接的な場所性は付与されうるのである[14]。

これは、教授就任論文自体の結語からの引用である。ここに魂の空間性、すなわち魂の場所性は完全に否定され、それにより精神の自由が確立されたと解することができよう。

以上において、我々は空間の観念性の持つ実践的意義を明らかにした。この時間・空間の観念性は認識論的観念からも重要な思想発展史的意義を持っている。それは次の点が明確になったことである。時間と空間における事物が物自体ではなく、物自体の単なる現象であること、そして時間と空間は感性界の認識に対するアプリオリな制約であり、これに対し、純粋理性概念が物自体の世界、すなわち英知界の認識に対する先天的制約となることである。

さて、教授就任論文における時間・空間論は『純粋

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

理性批判』の超越論的感性論へと展開されてゆく。その意味において、時間・空間の観念性の着想は、批判哲学への第一歩として、カントの哲学思想形成上意義づけることができる。

次に、今まで考察してきた感性的認識に対する悟性的認識を取り上げ、それと道徳哲学との関係を明らかにしてゆこう。

4．悟性的認識と道徳哲学

時間・空間が人間精神の主観的直観形式として、現象の形式的原理であるのに対して、「悟性的認識は事物のあるがままの表象」[15] である。それでは、この悟性的認識と道徳哲学とは、どのような関係にあるのであろうか。これが当面の課題である。

カントは、悟性的認識に関して二重の使用を考えている。一つは「事物または関係の概念そのものが与えられる」場合で、「実在的使用」と呼ばれるのに対して、今一つは「どこからか与えられたものが、ただ従属関係におかれる、すなわち下位概念が上位概念（共通徴表）に従属せしめられ、そして矛盾律にしたがって相互に比較される」場合で、「論理的使用」と呼ばれる[16]。「悟性の論理的使用はすべての学問に共通であるが、実在的使用はそうではない」[17]。感性的認識が与えられると、それは悟性の論理的使用によって他の共通概念としての感性的認識に従属させられる。

ここで最も重要なことは、とカントは注意を喚起して、認識への適用において論理的な悟性使用の働きが如何に大であったにしても、その認識は感性的と見なされるべきであるという点である。なぜならば、感性的認識はそれらの「根源のため」であって、同一性域は対立性に関する「比較」のためではないからである。したがって、最も普遍的な経験的法則でさえ、それにも関わらず感覚的認識である。感覚的認識や現象にあって悟性の論理的使用に先行するものは「現われ」と呼ばれるのに対して、悟性によって多くの現象の比較から生じる反省的認識は「経験」と呼ばれる。そして「現われ」から「経験」までは、論理的悟性使用にしたがう反省以外に如何なる道も存在しない。しかし経験の共通概念としての「経験概念」は、より高次の一般性への還元によっても「実在的意味での悟性的概念」とはならず、依然感性的認識に止まるのである。

ところで、悟性的認識に関しては、そこにおいて悟性使用は実在的となるが、対象にしろ関係にしろ、そのような表象は、悟性そのものの本性によって与えられ、感官の如何なる使用からも抽象されず、また感性的認識そのものの如何なる形式も含まないのである。この悟性概念を明確にするために、カントは「抽象的」という語の曖昧さに注意する必要があるという。抽象とは、「本来あるものから抽象すると言われるべきで、あるものを抽象するとは言われるべきではない」[18] としている。悟性概念は、一切の感性的なものを抽象するのであり、感性的なものから抽象するのではない。それゆえに「抽象された概念」というよりも「抽象する概念」という方が正しいとみる。ここから悟性概念は純粋観念、ただ経験的に与えられる概念は抽象された概念と名づけられる。ただしこのことから、感性的なものを混乱して認識されたものと見たり、悟性的なものをより明晰なものと見ることは、誤っているとされる。

なぜならば、これらは論理的区別に過ぎず、すべての論理的比較の根底におかれる「所与」には全く触れられていないからである。すなわち感性的認識が非常に明晰で、悟性的認識がきわめて混乱していることもありうる。このことは具体的には、感性的認識の典型である幾何学において、またすべての悟性的認識の方法論である形而上学において気づかされることである。つまり幾何学は、たとえそれが如何に明晰なものであってもその起源のために感性的と呼ばれ、形而上学はこれに対してたとえどんなに混乱していてもあくまで悟性的なのである。

カントはこのような純粋悟性概念によって「道徳的概念」および「道徳哲学」の概念を規定する。

> 道徳的根本概念は、経験することによってではなく、純粋悟性そのものによって認識される。しかし有名なヴォルフが彼にとって単に論理的区別に過ぎない感性的認識と英知的認識のこの区別によって、現象体と可想体の本性についての古代のかの有名な解明を、哲学の大いなる損失ではあるが、おそらく全く廃止して、そして心をその研究から非常にしばしば論理的些細事へ逸らしてしまったのではないかと私は恐れるのである[19]。

ここで注目されることは、カントの道徳概念が勿論感性的ではなく悟性的であるが、しかし悟性の論理的使用としてではなく、実在的使用として規定されている点である。

この悟性の論理的使用と実在的使用の区別は、1755年の『形而上学的認識の第一原理の新解明』[20] における論理的真理根拠と存在根拠との区別にまで遡ることができる。これは自由論における「認識根拠と現実根拠の慎重な区別」[21] である。

この区別に基づいてカントは、ヴォルフの条件的必

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

然性と完全な必然性、道徳的必然性と無条件的必然性という矛盾律による区別を批判したが、その同じ問題点がこの教授就任論文で再び批判されている、と見られる。ただしここでのカントのヴォルフ批判は、矛盾律に基づく論理主義的批判、すなわち単に認識根拠と現実根拠との区別からなされるだけでなく、「現象体と可想体との本性」の区別に基づいている。

ここに我々は、カントの道徳思想の発展を見るのである。つまりカントは道徳概念を、単なる感性的認識と悟性的認識との区別や悟性の論理的使用や実在的使用の区別に止めず、現象界と英知界という根源的二世界の区別に基礎づけているのである。したがって道徳概念は、経験的に「抽象された概念」ではなく、純粋悟性そのものによって認識される純粋概念である。

カントは、この純粋悟性概念を手がかりとしてさらに「悟性概念の目的」という観点から「道徳哲学」を規定する。カントによると、悟性概念の目的は主として二つある。第一は吟味的である。すなわち感性的なものと可想的なものを検討して区別し、誤謬による伝染から学問を守るのに役に立つ。その限りではこの目的は消極的であるに過ぎない。

第二は拡張的である。それによって純粋悟性の普遍的根拠が何らかの模範へと導かれる。それは純粋悟性によってのみ表象されうるが、その実在性に照らしてあらゆる他のものの共通の尺度となるのである。それは「可想的完全性」と呼ばれる。この完全性は二重の意味を持っている。すなわち可想的完全性は理論的意味では「最高の存在としての神」であり、実践的意味においては「道徳的完全性」である。ここからカントは「道徳哲学」を次のように規定する。

> 道徳哲学は、価値判断の第一原理を提供する限り、純粋悟性によってのみ認識され、そしてそれ自身純粋哲学に属する。道徳哲学の基準を、生活感情に無理やり帰属させる者が非難されるのは、きわめて正当なことである。エピクロスとある程度の距離をもって、彼にしたがったシャフツベリやその追随者たちのような若干の近代人が、それである[22]。

ここでは、次の二点が注意されなければならない。一つは道徳哲学が、価値判断の第一原理を与える限り、純粋悟性によってのみ認識され、純粋哲学に属するとされる点である。「価値判断の第一原理」とは勿論善悪の判定の最高原理を意味し、それを含む道徳哲学すなわち純粋道徳学には、純粋悟性認識のみが関与し、感性的認識は関係しないとされる。純粋道徳学はもっぱら経験を超越する英知界のみに関わる学と見られる。これは純粋道徳学の基本概念が純粋知性的であることと結びついており、これによって純粋道徳学は、経験的原理を全く含まぬ道徳形而上学の固有の領域を確保するのである。

そしてここから、もう一つの重要な結論が生じる。それは、道徳哲学の基準を快・不快の感覚に求めるエピクロスやシャフツベリらの説が非難に値する、とされることである。このシャフツベリと追随者たちの説が、モラル・センス説を指すことはいうまでもなく、モラル・センスが純粋道徳学の最高原理たりえぬとして斥けられるのである。その説は、もちろん善悪を快・不快の感覚に還元する卑俗な快楽説とは異なっている。

しかしモラル・センスは快・不快の感覚（満足感と嫌悪感）を伴い、それと結合して善悪を判定するものであり、その捉え方が、道徳哲学の基本概念の感覚の与りえぬ純粋知性的概念であり、純粋道徳学が悟性認識の学であるとの理由によって、誤りと見なされるのである。

5．道徳哲学の概念規定

以上から、教授就任論文における道徳哲学の概念規定は、次のように要約できる。

（1）道徳哲学は純粋悟性そのものによってのみ認識され、感性的、経験的なものを一切含まない。それゆえに純粋哲学に属する。

（2）道徳哲学は価値判断の第一原理を提供する。価値は純粋悟性の目的から導出され、その基準は模範となり共通の尺度となる純粋悟性の一般的原理でなければならない。価値は一般的には可想的完全性と言われるが、実践的意味では道徳的完全性と言われる。

それでは、この道徳哲学の規定は、カントの道徳思想の形成史の上から、どのような特徴と意義を持っているのであろうか。

第一にあげられるのは、広義の理性主義が確立された点である。この点に関して、カントは60年代の経験主義から理性主義ないし合理主義へと転向した、道徳哲学も純粋理性によってその普遍妥当性が基礎づけられたとみることができる。

ただし、教授就任論文では、悟性と理性の区別は未だ明確にされてはいない。純粋悟性には論理的使用と実在的使用の区別がなされていたが、少なくとも可想体を思考し認識する純粋悟性と価値判断の第一原理を提示する純粋悟性との区別、すなわち理論理性と実践理性の区別は未だなされていない。ここに批判期以

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

前としての特徴が見られる。

しかし、この純粋悟性はすでに道徳の根拠としての理性を含んでいることは間違いない。要するに、この教授就任論文における道徳哲学の第一の特徴は、従来模索中であった道徳の根拠が、感性からは独立の理性に求められた広義の理性主義が確立した点にある。

道徳哲学の第二の特徴は、道徳哲学が純粋哲学に属するものとして規定されたことにより、その純粋性のゆえに道徳の普遍妥当性が確保された点である。純粋哲学における純粋性は経験の超越を意味する。すなわち感性界の一切のもの、経験的なもの一切を超え英知界にその基礎を持つことである。そのために道徳哲学は純粋悟性によってのみ認識される価値判断の第一原理を提供しうるのである。

カッシーラーが、この純粋性を「アプリオリ」と解釈しているのは注目に値する。教授就任論文における道徳哲学について、カッシーラーは次のように解釈している。

> 既に教授就任論文は、道徳性の問題を全く「英知的なもの」の側に押しやり、シャフツベリにはっきり反対して、この問題を快・不快というすべての感性的規定根拠から切り離した。就任論文の送付に際してランベルトに宛てて書いたように、カントは倫理学の基礎のこの改革の中に、形而上学の今や変化した形式の最も重要な意図の一つを同時に見たのである。倫理学は、空間・時間の学説と同様に「アプリオリな」部門となった[23]。

ただし、カント自身はこの教授就任論文では、アプリオリ、普遍妥当性という用語による説明はしていない。しかしこれらのことは、「純粋性」の意味を積極的に解釈するならば十分に認められうることである。

道徳哲学の第三の特徴は、それが価値判断の第一原理を提示し、その限り道徳的完全性の概念を目的として持っている点である。

さて、カントは完全性の概念について、次のように敷衍している。

> その量が可変的である物のあらゆる類にとって最大のものは、共通尺度と認識の根拠である。完全性の最大は今日理想と呼ばれ、プラトンにおいてはイデアと呼ばれる[24]。

カントが道徳的完全性について述べるときは、プラトンのイデアが想定されており、その意味でカントの英知界は、プラトンのイデア界がその原型になっているとみてよいであろう。いずれにせよ、完全性の概念は悟性概念の目的であり、理論的意味においては神、実践的意味においては道徳的完全性となる。

神は完全性の理想として認識原理であるように、実在的に存在するものとしては、同時に全く一切の完全性一般の生成の根拠であるとされているから、この時点では道徳的完全性も神を根拠としていると見られている。このように神を生成根拠としている道徳的完全性の概念が、英知界と結びつき、この道徳哲学が提起する価値判断の第一原理の基準となっている点が一つの特徴をなしている。

道徳哲学の第四の特徴として、ここで「英知的直観」が完全に拒否された点をあげよう。教授就任論文では、人間に対し「英知的なものの直観」は、完全に拒否されているのである。

> 英知的な認識にあっては、如何なる直観も人間にはありえず、ただ象徴的認識だけがありうる。そして洞察は我々にとっては、ここの表象によって具体的にではなく、ただ普遍的概念によってのみ、抽象的に可能である[25]。

なぜならば、我々人間の直観は、空間・時間という形式的原理に束縛されていて、その下でのみ直接的に個々のものを識別するに過ぎないからである。そして時空の直観的形式原理は、感性的認識の条件であって英知的直観の手段でない。さらには、我々の認識の材料は感官からのみ与えられるが、可想体そのものについては人間の直観の一切の所与が欠けているからである。カントは、

> 我々人間の精神の直観は常に受動的である[26]。

という。これに対し神的直観は、独立的で完全に英知的なのである。

ところで、人間にとって英知的直観が拒否されるということは、直ちに英知的認識の可能性が拒否されることを意味しない。カントによると、物自体の認識は依然純粋悟性により可能だからである。この純粋悟性よる英知界の認識は、『純粋理性批判』に至るここからの 10 年間に否定されることになる、そのプロセスがそのまま批判哲学形成への道であるといえよう。この点について、カウルバッハは、

> カントは彼のその後の思索の過程で、一七七〇年の論文が、理性の領域を貫いて掘った溝に橋をかけねばならないであろう[27]。

と述べている。

6．批判哲学形成への道

さて、教授就任論文では批判哲学の形成にとって重要な意義を有する、感性のアプリオリな形式としての空間・時間の考察に主眼がおかれている。しかし、空

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

間・時間を完成の形式的原理とする、諸現象の連関と統一の全体としての感性界の構造は、「可想的完全性」たる一者を共通原理とする、多数実体の普遍的調和とその統一的全体としての英知界の構造、そしてまた普遍的意志の規則を共通規則として普遍的に結合する、すべての英知者の体系的組織としての英知界の道徳的構造、と表裏一体の関係にあると見られよう。

英知界は、一個の形而上学的世界であるが、しかし単なる知的好奇心や、煩瑣で空虚な思弁の産物とは異なり、人間にとって最も切実な道徳的実践的関心を中心にもつところの、純粋悟性のみの関わる世界、すなわち道徳的世界が、その主要部分として含まれる世界なのである。浜田義文は、この教授就任論文の意義について、

> ともかくここに感性界と画然と区別される、一切の経験を超越する世界としての英知界が、人間の悟性認識の特性に基づいて構想されたことの意義はきわめて大きく、批判哲学へ向かって決定的な第一歩を進めるものということができる[28]。

と述べている。

勿論ここでの思索は、まだ批判哲学の成立を告げるものではない。批判哲学の立場からそこに多くの未熟と不明確と独断を指摘することは容易である。我々としては、ここでは批判哲学にとって最も重要な区別である悟性と理性との区別がなされず、したがってまた理論理性と実践理性との区別がなされていないことを注意すれば十分である。純粋悟性の特性に基づいて英知界が構想されても、純粋悟性の能力の権能、範囲、限界についての明確な規定が欠けている。それによって英知界が成立する、純粋悟性による経験の超越について、超越の可能性が根拠づけられていない。

そのため、英知界は独断論的性格を強くとどめ、その内部に道徳界が含まれるとしても。その内部における位置は曖昧であり、道徳界は厳密な意味での実践的自由の世界として示されていない。形而上学はまず「人間理性の限界に関する学」でなければならないとして、形而上学の「予備学」の研究が着手されるが、「人間理性の限界」に意識はまだ十分に鮮明とは言いがたい。

形而上学の可能性、すなわち超越の可能性そのものが問われ、その根拠が明らかにされねばならない。人間理性にとって超越が如何にして可能であるか、どこまで許されどこから越権であるか、がまず確定されねばならない。これが人間にとって最も重大な超越論的問いなのであり、カントはこれを自らの哲学の中心的問いとして立てる。

超越は人間理性の運命であるが、高く昇るためには常に脚下を深く掘り下げることと高きを指向することとは精神の同一の営為の両面であることを知らねばならない。そのためカントは理性批判に着手するのであり、右の超越論的問いの最初の問いとして、

> 我々の内部で表象と呼ばれるものが対象に対して関係するのは、如何なる根拠に基づくのであろうか[29]。

という。すなわちアプリオリな経験認識の可能性に対する問いを立てて、その解決に取り組むのである。

批判哲学への道はまだ遠く、哲学的思索の長い困難な道程をさらに歩み続けねばならない。カントは前人未踏の道の前に立つ。それはカントがこれまでの自己の全哲学的営為、1760 年代の倫理学的思索の苦闘を通じて到達した地点であり、それらを背後に持つことによって初めて前方に開かれた批判哲学への見通しのきく地点である。60 年代を通じて獲得された、カントの倫理学的探究の積極的成果は、批判哲学の新しい構造の中で、生かされることになるのである。

7．おわりに

教授就任論文の考察を終えるに当たり、これに関係する書簡および手記遺稿に触れておきたい。この教授就任論文に添えて、ランベルトに送付された 1770 年 9 月 2 日付の書簡には、次のように記されている。

> 約 1 年前から私は、おそらく拡張する必要はあるにしても、いつか変更するという気遣いのない概念に到達していると自負しております。そしてこの概念によって、あらゆる種類の形而上学的問題は、全く確実なしかも簡単な基準によって吟味され、またどこまで解決されうるのか、されえないのかが確実に決定されることになるでしょう[30]。

この文中の「約 1 年前」とは、日付からみて 1769 年ということになる。この年は、いわゆる「69 年の大いなる光」で有名な次の断片が残されている。

> 私はこの学説を、初めあたかも薄明の中でみていた。私は諸命題とその反対とを証明することを全くまじめに吟味してみた。それは懐疑論を組み立てるためではなく、悟性の幻想を、それがどこに潜んでいるかを発見しようと推測したためである。69 年が私に大きな光を与えた[31]。

この「69 年の大いなる光」とは、空間・時間の観念性の把握と、それによる二律背反の解決に対する着想である。この解釈は、すでに定説になっているといってよいであろう。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

また書簡中の形而上学を吟味する際の「基準」とは、形而上学に対する「予備学」と見てよいのではなかろうか。そこでは空間・時間は、もはやニュートンやオイラーの提唱する絶対的な空間ではなく、人間の主観的直観形式なのである。そしてこの感性的原理を悟性的原理に拡張するとき二律背反が生じる。これは断片の中で示唆されているように、諸命題とその反対命題の論証の問題に他ならない。

それは結局「悟性の幻想」に由来するのである。これを防止するためには、感性的認識の固有の原理が自己の限界を超えて悟性的原理に影響を与える事がないように注意しなければならない。この着想が、それまで苦渋の中で追求し続けてきた形而上学の新しい方法に他ならないであろう。この方法をカントははじめ薄明の中で見ていた。1769年、今や「大いなる光」の下でそれが確実なものになった、と解される。

なお注目されることは、カントがこの同じ書簡の中で「道徳哲学」について、その計画を予告していることである。

> 今年の冬には、如何なる経験的原理も見出せない純粋道徳哲学と、いわば道徳形而上学とに関する私の研究を整理し完成したいと思っています。この研究は多くの点で形而上学の変化した形式における最も重要な意図に対して道を開くでしょうし、さらにそれらの意図において目下のところ未だあまりよく確定されていない実践的学問の諸原理に対しても同様に必要なものであると思われます[32]。

ここからカントが、従来研究してきた形而上学に基づいて、純粋道徳哲学と道徳形而上学、すなわち超経験的、アプリオリな道徳の純粋理論とその適用を整理し完成させる意図を持ち、しかもその意図は遠からず実現されうるという見通しすら持っていたことが推察される。

しかしこの純粋道徳哲学と道徳形而上学は纏った形で発表されることなく、したがってこれらの道徳学を直接考察することはできない。それゆえ批判期に至る1770年代の道徳思想の形成と展開についての研究は、手記遺稿集と『倫理学講義』によって考察し、さらにそれを再構成する以外に方法はない。この点の考察については、今後の課題としたい。

註

（1）川島秀一『カント批判倫理学—その発展史的・体系的研究—』晃洋書房、1988年、217頁。

（2）カントからの引用は、慣例によりアカデミー版の巻数（ローマ数字）、ページ数または書簡の番号（アラビア数字）を表記する。
X．51.

（3）Ⅱ．395.

（4）X．98.

（5）Ⅱ．392.

（6）ebenda.

（7）ebenda.

（8）Ⅱ．398.

（9）Ⅱ．397.

（10）Ⅱ．378.

（11）『視霊者の夢』については、拙論：カント『視霊者の夢』における「英知界」の意義について、福島高専研究紀要第47号（2007年2月）、67－74頁を参照されたい。

（12）Ⅱ．323.

（13）Ⅱ．414.

（14）Ⅱ．419.

（15）Ⅱ．392.

（16）Ⅱ．393.

（17）ebenda.

（18）Ⅱ．394.

（19）Ⅱ．395.

（20）『形而上学的認識の第一原理の新解明』については、拙論：カントの就職論文における意志の自由、福島高専研究紀要第45号(2005年2月)、93－100頁を参照されたい。

（21）Ⅱ．398.

（22）Ⅱ．396.

（23）E．カッシーラー『カントの生涯と学説』（門脇卓爾他監修）みすず書房、1986年、139－140頁。

（24）Ⅱ．396.

（25）ebenda.

（26）ebenda.

（27）カウルバッハ『イマヌエル・カント』（井上昌計訳）、理想社、1978年、120－121頁。

（28）浜田義文『カント倫理学の成立　イギリス道徳哲学及びルソー思想との関係』勁草書房、1981年、198頁。

（29）X．130.

（30）X．97.

（31）XⅧ．69.

（32）X．97.

NII-Electronic Library Service